

## 第8回 復興とは何かを考える委員会 議事録〔速報版〕

- ◆日 時：2009年12月12日（土） 14：00～17:00
  - ◆場 所：関西学院大学 丸の内キャンパス  
（東京都千代田区丸の内1-7-12 サピアタワー 10F）
  - ◆報告者：越山健治（人と防災未来センター）←変更されました！  
大矢根淳（専修大学）
  - ◆参加者：大矢根、越山、矢守、宮原、上村、所澤、佐藤、君嶋、菅、中川、永松、中林、  
山中、磯辺、（以上、報告者より右回り）
- （記録者：菅）

### 【報告1】越山健二

専門は工学 工学部建築学科計画系出身。設計図を描いて構造計算をする建築科ではない。人が集まる環境はどんどん危険になっていくという特徴がある。空間的な制約を持たせることで、安全性を確保・管理をしていく。安全を担保するために規制・管理が必要。そこに計画論が求められる。これが自分のベース。

今日は本来復興学会で話しをする予定だったテーマ「復興評価に関する一考察」について

復興に関わる二つの言葉

- 1) 「～からの」復興：戦災復興、震災復興
- 2) 「何（目的物）の」復興：人間復興、地域復興

「復興であるからには」の3つの前提

第1前提：時間軸の存在：「前があり、後ろがある」。

点がある場合

点がない場合 同一対象物の相対比較

第2前提：起こすものがある

減じたものがある、高みにのぞむものがある

第3前提：興したいという力（プラスに向けた運動）

ある時点で現在及び未来に対してプラスを望む力が必要

この3つがあると考えるとこのグラフになる。

これにどういう意味をつけるのか。社会の状況によって徐々に下がるものもあるだろう。

縦軸に何か一元的なものを入れると復旧になる。

例えば、道路橋梁可能数、人口など。

縦軸とは何か？ 結論からいうと「何か」総合的な要素が組みあわさった何か。

具体的に示すと復旧との差異が見えない。

抽象的な概念ではなく、測定・評価可能なものである必要がある。

主成分分析的アプローチによって表現できる。つまり、総合的な一指標にまとめていく概念であって、因子分析とは逆のアプローチ。

次に社会心理学の3つの世界。関大の社会心理学の土田先生の講演から

- ・ 物理的世界として、空間。Physicalなもの
- ・ 精神的な世界は、個人の内面・主観
- ・ 社会的世界、成立していると思われる。規範など。

物理的なものが時間軸に沿って修復されているだけでは復興とはいえない。

精神的世界で個人がそれを認めない。その集成的な社会的世界がそれを認めない。

社会的世界が認める縦軸の存在。それは物理的なものとリンクするわけではない。

講演では、冥王星の存在を事例に出して、物理的に測定できるし、社会的にも存在することになっているが、個人の精神的な側面にはあまり関わってこない。それぞれの世界の中で、(特に社会的)復興をどう位置づけるのか？ 特に社会的世界の中で位置づけるのか。

一事例として、京大防災研の林先生の研究。生活復興感の研究。災害後の測定指標を作った。過去と相対した、昔と比べ現在はどうか。復興したという感覚。

都市復興計画が復興の中心だった理由。

昔は物理的世界の復興が、精神的・社会的世界の復興を引き上げる存在だった。

但し、社会全体が上向きの力を持っていた時期であるということが条件だった。

現在の都市計画に、復興をする力が薄れてきた。学会でも 1980 年代。まちづくりや地域計画に注目が移ってきた。こんなときに災害があると…。個々人の復興感を高めていく方向にシフトしてきている。社会全体が安定・右下がりのトレンドに向かっている。

永松)

村井さんの個々人の復興。難しい世界。成立させるのは難しい。

越山)

もう一つの方向性として、社会全体が余裕を持つこと。1人の人を助けるために1人の方が対応するより、多くの方が支援する方が良い。

復興が終わる時期とは？

上向きの何かがあるというのが要件。

都市復興研究が取り組もうとしている方向。

次世代の物理的社会のあり方に兆戦する場でもある。

#### 【質疑応答】

上村)

上向きに力が働く。マイナストrendでも、(力学的な力が働く)変極点があれば、上向きとい

える。それから、復興するのは、社会ですか、個人ですか？ 個人個人の復興の総和か、一つの社会が復興したということか。

君嶋)

違和感がある。

上村)

復興感という言葉がしっくりこない。

矢守)

この図は素朴な捉え方で。学問的には最先端ではない。一見物理的世界に見えているものが社会的世界のことであった。社会的世界で語られていることが、物理的世界のこともある。社会心理学はこういうことを対象に研究をしている。

矢守)

冥王星のメタファーを逆に捕らえた。社会的世界では全く関係ない。日常生活には何の意味をもたらさない。しかし物理的世界ではある。それぞれがさしている世界が単純ではない。

越山)

物理的世界は一義的に決まると思っている。ある空間は、一義的にきまる。これをどう捉えるかが、社会的・精神的な世界では多様に存在する、という理解。

矢守)

例えば、虹の捕え方。文化によって色彩数が違う。

鯉の池の捕え方。防災的には壊れたら厄介なものだという捕え方などなど。物理的なものに、様々な意味づけがなされていく。逆に、与えられた意味をどんどん剥ぎ取って行って、最終的に意味を完全に排除した世界は何も残らない。物理的世界も流派によって違う。それも一つの意味の世界。

中林)

社会的世界の社会とは？ 社会学のフィールドは人間の住んでいる社会か？

狭い意味で社会的空間ではなく、

矢守)

対象が人間の住んでいる場所であれば、成立しうる。

中林)

個人の精神世界の中でも、西方浄土と、物理的世界の冥王星と近いのでは？ 関係ある人もいるのでは？

宮原)

精神的世界はそれほど、哲学ではなく。個人対社会という仕分けではないか。

復興の測定では、質問紙で聞いて集計する。復興感を図る。それで良いのか？

物理的世界では分かり易い。その間にある社会的世界が難しい。

私は、インタラクションがあるもの、相互振動。それが社会と捉えている。

相互作用なしには自分の精神が持てない。個々人がばらばらに感じているのではなく、もれてしまうものがある。

三宅島で小学校再開して、復興したと感じる。単純な個人ではない。三宅島を愛する三宅島が感じている。あるちいきの一員として、単に酒鑑定評価ではない。社会の中で感じていることが重要。これをうまく数字にするおとは不可能ではないかもしれないが、感じる人間が抽象的なばらばらの個人ではない。固有の地域のメンバーとして。前と比べて感じる。その表現を豊かにしていく必要がある。

越山)

もう一つの前提として、災害は地域を限定する。復興の言葉を使う地域とそうでない地域がある。外部とのコミュニケーションする時に、自分達が復興したことを何と言うか？

コミュニケーションするのに、ここまで復興したことを伝えるために、質問紙(調査)が必要。

外部-内部のコミュニケーションを可能にする。ツールが必要。

宮原)

復興という言葉はそもそも大げさ。自分個人の生活が被災する。元に戻ったとき個人として復興という言葉を使うか。個々人の家族については使わない？ 対象が社会の場合に使う言葉。

この質問項目は誰でもあることで、共同的な関心事。社会が共通にこれは無視できない、皆で扱っていかなければならない次元の言葉。

上村)

地域復興という言葉を使ってきた。社会の復興と言ってしまうとスケール感が分からない。人間復興というとうどうなのか。復興感に関しては、こういう切り取り方をされると違和感がある。

君嶋)

この復興曲線は、被災者と話をするときは使わないほうが良い。若い人ならいいが 60 代の人には悲壮感がある。

中川)

変極点があればそれで良い。一歩進めたらよい。

中林)

あの曲線を個人の復興に使うのは間違い。使い方。強制的に規範を与えるので、行政に対して上向きの力を作っていくための道具。

## 【報告2】大矢根淳

課題：「復興」について考えてきたこと～研究過程（課）・生活史（自分史）に即して

この研究会が始まるのと並行して、永松さん・菅さんから復興に関する先行研究について質問された。当時のことなども盛り込みながら、また、11月20日頃、北京で地震局、中国科学技術戦略発展機構 四川の質問紙調査世帯2年目のデータがまとまって、その分析結果を発表する国際シンポに出てきた。日本からの研究者は、私と木村玲於さん。彼や中国の研究者と話をしてきたことも、今日の話に盛り込んでみたい。

過去7回までの議事録を拝読し、色々な概念、現場の紹介があったが、一貫して問い続けられてきたことは復興とは何かということ、自分は「プロセス」として捉えて来た。それをどう測定するかは難しいが、測定に関する自分のスタンスも話したい。

これまで25年くらい復興について考えてきたが、今日は、どういう勉強の展開をしてきたか、その時、身近にどんな人がいてどんな研究をしていたのか、社会的出来事として何があったのか、自己紹介のような形で、そうしたことも紹介しながら話をさせてもらいたい。

今日のこの場が大切なのは、その時代の様々なエキスパートの研究をどうみてきたのかを、ご本人の前でお話をさせていただけるということ。私の目に先生方の研究がどう映ったかを話すので、それに対するコメントをいただければ。

学部は法学部政治学科。どぶ板選挙の事務所でインターンをしたりしていた。そこで読んでいたのが、奥田道大先生の都市コミュニティ論。当時先生は真野の研究をしていた。真野は震災後有名になるが、シカゴ学派や村落社会学を踏まえ、民族史的な研究をしていた今野裕明先生がいて、真野を研究していて、先生とも交流しながら、震災後、真野の近くにあった御蔵地区の復興過程の調査をさせてもらっている。そこではミクロな政治過程として、コミュニティを捉えてきた。

大学院の最後で、コミュニティ論に防災研究を重ねて行こうとしていたが、指導教授が海外研究でいなくなり、災害研究なら早稲田ということで、早稲田に行った。そこで災害を研究していた秋元先生も海外に行ってしまったので、安倍北夫先生のところで、当時パニック研究をされていて、一对一の授業で厳しかった。

未来工学研究所の吉井博明先生の下で、横に田中淳先生がいて、そこでシンクタンクの研究もした。当時、チェルノブイリの事故があったが、何をどう調べていいか見当もつかなかった。秋には大島の噴火があって、避難してきた人たちの支援をした。今でいうボランティアのような活動。そこで風邪をうつされると一員になれたかなと嬉しかった。

地域社会論で災害研究をしてきた。その切り口として、関東大震災直後、内務省社会局が、被災者の全数調査をしている。ここで職業と住宅の将来見込みを出し、同潤会の住宅政策に反映させていった。歴史研究の切り口で、先行業績を徹底して洗えと言われ、旧図書館にもぐって、調べた。

マスターの後半頃から、調査研究のスタイルを学びながら、災害現場に関わってきた。  
この頃雲仙の噴火があり、91～93年は1ヶ月毎に2～3週間、雲仙で調査をしてきた。ポストドクだったということもあり。その後、北京の大学に教えに行く機会を得た。フートンの問題。地元がどう問題を克服してきたのか、日本での被災地域社会のものの見方を、北京研究に重ねていった。その人たちの生活の危機が何か、文革をはさんだ経験を、ミクロな地域政治史を見てきた。

併せて、シンクタンクや東大の新聞研で、システム工学的なことも学んだりした。また神奈川県西部地震の被害想定調査にも関わった。ここで初めてシナリオ型被害想定が行われた。(地震工学に)素人の社会学者が関わったのは、劇のようにシナリオを展開させていく想像力があり、現場の動き方についてイメージが持てたから。そこで一街区の被災シナリオを書いたりした。そんなことをやっている時に、阪神・淡路大震災があったりして、江戸川大学の助手に就任、阪神の調査をした。西宮北口の再開発事業について。このエリアは全壊率97%の地域。他の黒字地区に比べて、スムーズに進んだ事例。その要因を分析した。

当時、復旧・復興が、都市計画の言葉で語られているという違和感があった。にしきたの調査を数年行った後、4、5年経ってから御蔵にお邪魔するようになった。

また、防災に絡むまちづくりを見ていこうということで、紹介を受けて、東京の事例や、大阪の堺の港●地区などみてきた。その経緯の中で復興を考えてきた。

復興をどうみているかについては、プロセスとして捉えている。

どういう尺度で考えているかという点、方法論は煮詰まっていないが、レジュメの中にあるB5の紙で、表1に生活再建を扱う研究一覧がある。ここに中林先生の生活復旧曲線もある。

海外に目を向けると色々ある。裏面の表1ハリケーン・フィフィの研究。こんな項目でこんな調査をしていることが分かる。社会的・宗教的背景が違うので、日本と違う項目になる。

表2の三陸津波。山口弥一郎が一軒一軒回って詳細な聞き取りをしていて、地域ごと沢山データがあることを掘り起こした。

表4は、調査名だけだが、どんな調査が行われたか。どんな項目がどのように質問されてきたかを示している。

ここで研究の中身を具体的に紹介する。

レジュメ p2の関東大震災調査報告。都市計画史。

社会学の社会調査方法史としてみた。内務省の社会局がまとめているが、震災後1ヶ月後に企画され、全数調査されている。なぜこれが可能だったのか。1920年、国勢調査が行われている。統計をそろえて先進国としてデビューしていく。そういう意気込みで国勢調査を行っていた。これと同じ手法で、同じスタッフで行うことができた。運賃や郵送費をただにするなどのノウハウも継承。この調査結果が、復興住宅、職業政策に使われていった。その時代の被災と復興のあり方を勉強できた。

次が雲仙普賢岳。

上木場の復興の展開を調べた。ここで木村拓郎さんと出あった。木村さんは市役所の横の喫茶

店、あるいは仮設住宅を回っていて、そんなところで地元の状況を聞いたりした。

雲仙では、具体的に上木場復興実行委員会をミクロな政治過程としてみていた。数千万の生活再建資金の獲得を、どうやって行っていたか。

木村さん達が、プライバシーに踏み込んだ意向調査を取りまとめ、それを上木場復興実行委員会の事務局長の山下一郎さん一名が担当職員に手渡す。何月何日までに回答を求める。他の地域は鉢巻して運動していた。不満を出せば、記事にはなるが、解決にはつながらない。

山下さんは酒屋で島原市の議会事務局長としての経験を持っていたので、民主的なプロセスが必要ということを知っていた。まず議会で説明するためには、データが必要で、木村さんを巻き込んで要望調査を行った。

ここで使った言葉が、「ふるさと」と「生活再建」。行政が使う復旧・復興は使わなかった。

このプロセスで、他の被災地はどうだったのか。例えば、三宅島や有珠山噴火、鹿児島を視察して、家屋や産業をどう復興させたか、間接被害にあった人をどう手厚くみてきたかを調べた。

上木場復興実行委員会の方法論が、周辺の被災地に取り入れられ、それが一つの（復興の）トレンドになっていった。その集大成が2000年にでた『噴火を●●』。一冊1000円でお土産やさんで売っている。

何のために作ったか。自分達の参考にさせてもらうために見せてもらった三宅島、有珠山に返すため。保険金詐欺を集団的に行う手法が書いてある。読む人にとっては問題に映るだろう本だったので、本屋さんに並ばず、お土産屋さんで並んでいる。ここに、被災地の奮闘努力が記録に取られていて、学問的に裏づけされた記録が残っている。

（霞ヶ関を跳び越して）これを「東京とばし」と読んでいる。被災地同士でノウハウを共有していく。その一環として、三宅の平野さんが、山古志の長島さんのところにいつている写真になる。

山中先生が朝日新聞で2004年11月ころに囲み記事で、「中越の震災は阪神と同じように見てはいけない。雲仙や三宅の事例が参考になる」と書かれていた。後でこの頃、どんなことを考えていたのか、お聞きしてみたいが、この写真の記事は、山中先生の記事と同じ頃に、平野さんが長島さんに復興の極意を伝えにいつている場面。ここには「励まし」と書いてあるが、実際はそんなものではない。

阪神・淡路大震災では、一週間後頃に被災地に行った。現地で違和感があったのは、都市計画やっている人たちの棲み分けが出来ていたこと。会社とコンサルの名前が決まってきた。都市計画の手法が進むことが前面に出ている。過去の被災地で見してきたこと。出来事に関わる主体分類。どんな人がどんな立場で関わってくるのか。その後マルチステイクホルダーといわれているが、現場では雲仙でも法制度の弾力的運用が行われていたが、事業制度の構造的限界が見えてきて、それを指摘するのも社会学の役割。その視点で、にじきたの商店街の復興を見ていた。

その際に参照していたのが、中林先生の生活復旧曲線。

もう一つは、アンソニー・オリバー・スミスのポスト・ディザスター・ハウジング・リコンストラクション論。復興のプロセスで（問題のある社会構造・社会関係を）再生産してはいけないというもの。

それらを読みつつ、雲仙・阪神の調査をしながら、一方で、足元の大学で区画整理が行われていたので、プロセスをゆっくり観察させてもらった。

どういう観点からか、というと、中林先生グラフの横にある木村玲於さんの曲線。対数を取っていくという方法。ウェーバー・ヘヒナーの法則が根拠。心理学領域の方法論をあてはめている。これと全く同じ、中林先生も基本形を挙げている。木村さんのグラフは、曲線を提示した後、波形が描かれる妥当性、適応可能性を。科学的根拠を突き詰める形で行っている。地域安全学会の木村さんの論文を見て、彼が中林先生の研究を知らなかったことを知っておどろいた。我々は感覚的に3日を区切りとしてつかってきた。3年目に疑うとか。あと、社会学では生活構造論から、家族・世代の視点もある。

永松) 事務局質問・コメント：

最後のページに記されている復興の定義について。

大矢根)

「復旧とは、現実的な具体像。目に見える形。これに、近い将来の社会変動のパターンを織り込んで構想される現況被災生活の一つの到達像が、生活再建。そこにいたるプロセスが復興。」このプロセスには多様な主体が参画。発言をしなくなって引退した人が復活する場合もあれば、漁業権保障などの動きも出てくる。壮大な集団力学的研究が見えてくる。

事前復興という概念もあり、また矢守先生の生活防災など。減災サイクルに位置づけながら復興に取り組む日常的な取り組みを考えていく。これは災害からの復興からは位相がずれてくるので、今日は触れない。

社会学的なもの見方もあることをお伝えしたい。

【回答・コメント】大矢根先生の質問に対して

山中)

中越のとき、神戸が金科玉条のように語られているのに違和感があった。山の災害は、すぐに復旧が始まらない。被災状況が続いていく。相対化することで、一つの復興が生まれる。

神戸もその一つ。つなぎ資金的な生活再建ではなく、雲仙・三宅のように生活再建をどうするか。その頃から、今やっている全国被災地交流会のことを考えていた。

被災地はゼロからの出発。特例主義、暫定主義で条例にならずに、その場限りの対応になる。被災先進地の先例を集めてこななければならない。被災地が手を結んで極意を伝え合う仕組みが必要と思った。それは被災地だけでなく、メディアも同じ。いつもゼロから取材する。過去の取材を勉強していない。同じ失敗をしてしまう。ここにもものすごくロスがある。これを縮めた。極意を伝える会が必要と思った。この頃はそう思い始めた最初だったように思う。

小松左京が朝日新聞の論壇で、総合防災(?)を始めたが、復興の方がむしろそうだと思った。それで復興学会も現場視察を交えて行っている。

中林)

酒田大火が防災を始めたきっかけ。その1年前、1975年の5月1日に都立大学の地理学科の



助手になった。教授がゼロメートル地域の研究をしていて、東京消防庁の委員。大火の翌々日に消防庁の火災調査で現地についていくことになった。鎮火した 25 時間後。湯気がたっているような、特有の臭さ。おしんの舞台で有名だったが、中心商店街が消えた。きわめて衝撃的。都市防災に目をむけるきっかけになった。

私の持っているツールは都市計画。都市研究センターできてすぐの創刊号に酒田の計画がどうつくられたかを紹介した。阪神・淡路大震災の都市復興の原型は酒田モデル。建築基準法 84 条の規制をかけて、そのエリアを中心に 2 ヶ月で決めたが、酒田の場合は、3 日目に区画整理案ができて 1 週間後に説明会。

その後、70 年代～80 年代にかけて地震が多かったので、取り組んだ。酒田 10 年目の 86 年に、建設省・都市生活サイドで「うまくいった」という評価。酒田市出身の学生の感覚では「都市は寂しくなっている」といわれた。都市計画は空間整備をするが、社会的なことは目を向けない。10 年後なので元に戻っているという前提で、火災の後、いつなにがどうなったかを、尺度も作らず、イベントを物指しにして、聞いていった。

燃えた範囲が分かっていたので、店になっていたところに事業所用のアンケート、住宅には住宅用のアンケート、また自営業用も作って行った。

地方都市だったので 10 年後も被災者が再建して住み続けているケースもあった。横軸に時系列、10 年たっていて間隔が長くなるので対数を使った。火災から何日目として聞いていった。全体を 100%にして、累積曲線にしたが、ハード・ソフトによって違う、回復に時間がかかったものもあった。災害は被害、復旧は直接被害より間接被害で、いつごろどういような手当てをすると、被災者に届くのか、逆にいつごろまでに何をしなければいけないのかを考えた。生活支障期間をイメージしながらグラフを考えた。

基準をどこに取るのか、えいやと 70%にした。中流の線で設定していた。8 割か 6 割かによって支障期間が変わってくる。早く回復させたい場合は前にもてくる。私は 70%に基準をおいてみた。

区画整理をすると回復は遅れる（右に動く）が、個別再建だと少し左に動くだろう（早い）。その後、地震災害の場合等も考えてみようということで、長野県の王滝村の事例を調査したり、越山さん達と奥尻島にも行った。20 年目にもう一度酒田調査をしようと思っていたら、阪神・淡路大震災が起こってできなかった。30 年目 2006 年に、酒田出身の修論生とやってみた。神戸でも行ってみようと思ったが、できるような状態でなく、また林さんたちが行っていたのでしなかった。この曲線にはある種のこだわりを持っている。

ことの発端は、「いつごろどんな支援をしたら良いのか」ということと、行政の復興事業と被災者の復興のズレを、行政側が見ていくための道具として。

#### 【質疑応答】

永松)

生活再建が目標で、復興はそのプロセス。という理解でいいか。

大矢根)

個々の被災者には相対化できない。日々の生活のことだから。生活再建の中には、復旧もあるが、近い将来の変動も組み込んで、それに乗っていけるかどうかということ。林さんの生活復興という概念が出た時、分からなかった。

永松)

雲仙では復旧復興を使わなかった。当事者が使わない。越山さんがいうように、(復興は)外部とコミュニケーションをとときの言葉。復興という言葉を使うと、政府の使う言葉。政治的な意味合いを持っている。当事者と違う世界とのコミュニケーションの部分。復興は当事者にとっての目標ではない。もっと別のところで必要とされている言葉なのかと思う。

宮原)

阪神・淡路大震災の後、復興ということばが、メディアに取り上げられて、大衆的に入ったと思う。阪神・淡路大震災は大きくて、その後、物理的な再建だけでなく、生活という側面での復興という言葉が入ってきた。それは雲仙の時とも違っているのでは。

中川)

「創造的復興」という言葉がぽんとでてきたのも大きい。被災者にとっても語らなければならなくなった。

中林)

2週間後に84条制限がかかったときに、初めてでてきた(言葉)。6ヶ月後、区画整理をする。と個別の再建は遅れるが、まち全体をどうするか。これ、逆ならどうなるか。つまりとりあえず仮の生活を再建して、その後まちの再建をというのは、普通の都市計画と変わらない。これは難しい。

宮原)

少しずつ(復興の)意味が多様化してきた。10年前から変わっている。両方へ依存している。財務省主計局の概念では、復旧と復興は違って、復興は国がやらないこと。そこに人間復興という分からない観念が入ってきた。

中林)

阪神・淡路大震災では都市計画反対＝復興反対という議論ばかりで、トータルな復興議論をしなかつた。復興＝罪悪のごとく受け止められてしまう。でも(復興は)都市計画だけの言葉ではない。ある部分の上向き。復興の言葉の向こう側には総体としての社会や仕組みがある。越山さんの絵のフィジカル、ソーシャル、サイコロジカルな復興があるのでは。復興という言葉は、日常的に使わないということも。日常にはない力を出すために、内側・外側にあるポテンシャルを引き出すために、復興という言葉が使われているのかなと、大矢根先生の話しから考えた。

矢守)

表現が難しいが、この（木村さんの）表は、ある種の錯覚を与えているところがあると思っている。この曲線で表現されているのは、あくまでマス。個々人の集積であって、個人の感覚ではない。が、これを見ると、個人の意識がこのように曲線を描いているように見えてしまう。でも個人の感覚ならもっと不連続。階段式に変化するのではないか。どの段階でどんな要素が入ってくるのかについて見たのが宮本君の研究。もっとエピソード的。個人ベースでは変わっている。

宮原)

先ほど大矢根先生の話聞いて、表1と表4は全く違うと思った。中林先生の項目は facts。木村さんのは主観。復興が主観的でカレンダーのように断続的に進んでいくというのは違うのではないかと思う。

佐藤)

中林先生のグラフの中の項目で、経済的な指標で元に戻っていないものもあった。こういうものが重要。

永松)

これを個人の復興感の総和としてみる。

山中)

この表を見て、「これで復興が終わった」と政策的に利用されるのが一番怖い。県外被災者の追跡している人から、ある家庭で、(〇〇事例紹介…詳細聞き取れず)、ある学者が示す方向性に終わらなくて、政治的に使われる可能性がある。

上村)

ゼロがあって100%まである、この図は好き。指数関数。数学的モデルが作れる。差が出た時にその間を埋めていくという議論。越山さんの議論では、災害前のトレンドがどうなっていて、災害でそれがどうなるのか、またその後、何を目指していくのが課題になっているが、これが全て問題になる。矢守先生の指摘も非常に重要だし、中林先生のドライな指標も、どういう力が必要かを考えるために重要。「近い未来の社会変動パターンを織り込んで…」という議論も腑に落ちた。

大矢根)

質問に関して。我々は厳密に考えていなくて、どの項目を、いつまで調査すれば良いの？というところから、

とりあえず3で区切って見せてきて、それを意味づけようとしてきたが、政治過程の場合は、年度で3年単位。学問的には、生活構造論で、世代という時間の幅が出てきた。このグラフでは客観的な指標、心理学で認められたものを持ってきているのは、参ったな、と思うが、それで何が説明できているのかというと、分からない。世代の再生産や、ミクロな政治過程から出ているものの方が、実態を説明できることが多い。

上村)

今日分かったことは、いずれにしても、ログスケールだということ。

山中)

3や10で区切ることに意味がない。

矢守)

全体系を決めて、その枠の中でどうか、という考え方。つまり限界逓減の法則で、人間の感覚はこの法則に従っている。刺激に対して拡大して反応できない。砂糖1gと2gの違いと、100gと101gの差は、前者の方が大きい。それが生物の本質。でも、生活復興カレンダーも、そもそも、質問紙に答えていない人がいる。100%の考察対象から外れている。枠の中を決めてシステムの全体を見れば、限界逓減法則は当てはまる。でも今の議論は外側にいる人にも目を向けないと。

中川)

何かのきっかけによって変わる。(復興への)変極点を与えるものは何か。(そのための)社会や支援はどうあるべきか。社会の復興に向けて動ける強さ、のような部分を見ていく必要がある？

矢守)

そういうものと一緒に議論するのではあれば、(このグラフも)役に立つ。これで何か決まった事実が分かった、実証された、とするのはむしろ暴力。

中川)

個別のエピソードを集める。ある程度の量を集めていく。  
何かのステップをあげるきっかけが何か。それが無い人に対して、どうサポートするのか。それを累積していけば、何かが分かるか。

上村)

宮本君の研究は、累積できるような形でデータを取っていない。時間の取り方も何も、非常に漠然としている。支援のあり方をどうみていくか。質問の過程で、相手が振り返って気づく。共同作業。

矢守)

(宮本君の遺族調査でも) こんなに不幸な人がいるのかというくらい、不幸の連鎖が起こっている。不幸の連鎖がいかにか起こってくるのか。一つ一つについては対策があるが、一時点で何かに対する評価をしても… 一人のパスを負っていかなければ分からない。ある種の政策を組み合わせて、経時的に行わないといけない。ということが分かった。

山中)

追跡していったら… 定量化するものではない。

上村)

どういうツールで何を読み取っていくか。

永松)

村井さんの最後の一人まで、の議論とは逆行する。

●●) 上村?

出たところで、間違った読み取り方がされる。

見方によって全然変わってくる。質問の仕方が、判定するように聞こえてしまうのが気持ち悪い。

宮原)

アンケートの回答者の仕事・学校が戻っても、周囲が戻っていなければ、復興したといわない人もいる。

●●) 上村?

復興の主語は誰か。また個人でも、家長としての立場、自治会の長という立場で、それぞれ復興したと思えるか否かは変わってくるだろう。

永松)

今日は欠席裁判のような形になってしまったが、これだけ話題になったのだから、一度、京大防災研のメンバーに来てもらって復興感調査について話をしてもらおう機会をつくりましょう。

大矢根)

政治プロセスとして考えること。これも重要。

中林)

主観的-客観的な復興をどうするか。「お前そんなところで、満足してはだめだ。」という話をどこで解決するのか。政府が思い込ませることもできるという危険な要素もある。

主観的・復興感・満足感 尺度評価は、いかようにも解釈できる。

君嶋)

行政的には、この復興カレンダーを見て「もうここまでできているのだ」という風に使うだろう。自分に都合の良い見方をすると思う。

中川)

一方で3割をどうするのかを考えるのも行政の役割。

永松)

事務連絡。1月11日の11時半～16時、公開WS。当初分科会を予定していたが、やらないで、パネリストを立てて行う。来年、2月3月も、行う予定。2月13日東京、3月13日神戸、実施予定。2月がWGの文献調査報告。3月に京大防災研に話をしてもらうことに。